

## 国際ティワナクシンポジウム

### 「Transformaciones y continuidades sociales en la formación del Estado Primario」

(初期国家形成における社会の変容と継続性)

佐藤吉文 (国立民族学博物館外来研究員)

本シンポジウムは、国立民族学博物館ならび文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (S)「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」(研究代表者：関雄二)主催のもと、山形大学人文学部、新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」計画研究 A03「アンデス比較文明論」(研究代表者：坂井正人)を共催にむかえ、古代アメリカ学会の協力をえて2015年2月14日(土)に国立民族学博物館第6セミナー室において開催された。

本シンポジウムにおいて取り上げられたティワナクは、紀元後500~1150年頃にティティカカ湖南岸に栄えた大遺跡である。1980年代半ばよりすすめられた長期にわたる学際的調査と活発な議論・研究によって、研究者のなかには、この遺跡を、ペルー北海岸のモチェや中央高地のワリと並んで、古代アンデス文明において自立的に国家段階の政治機構を発達させるに至った初期国家の中心、つまり首都として認識するものもいる。

ティワナク国家の成立過程を北海岸のモチェと比較すると、ひとつの問題系が浮かび上がる。それが社会の断絶性と連続性である。モチェ国家の中心となったペルー北海岸では、祭祀センターを中心として繁栄した形成期社会は国家社会の成立のはるか以前に一旦崩壊するため、形成期社会と国家社会のあいだにはある種の断絶がある。それに対し、ティワナク国家に先行する形成期社会(前1500-後500年)は北海岸のように崩壊することはなく、国家はあたかも形成期社会の持続的帰結のように成立する。では、ティワナク国家の成立とは、形成期社会の一亜種にすぎず、両者のあいだには大きな変容はなかったのか。それとも、両者のあいだにはたしかに変容が生じたのか。変容があったとすればどのような側面に認められ、それは成立後の国家社会をどのように支えたのか。このような問題を問うことが、古代アンデス文明における国家社会の成立要因とその多様性を理解することにつながる。

本シンポジウムでは、ティワナク遺跡の発掘調査に長年たずさわりの、現在では形成期の最重要遺跡のひとつであるコンコ・ワンカネ遺跡の発掘調査でも指揮を執るジョン・ジャヌセック(ヴァンダービルト大学)、ティワナク遺跡の形成過程を大型建造物に使用されている石材の丹念な分析から論じてきたアレクセイ・ヴラニッチ(カルファオルニア大学ロサンゼルス校コッツェン考古学研究所)、土器の詳細な属性分析にもとづいて形成期の土器製作伝統をめぐる社会関係を検討してきたアンドリュー・ロディック(マクマスター大学)、ティワナク国家の地方拠点であり、形成期の祭祀遺跡でもあるパレルモ遺跡の発掘調査をおこなった佐藤吉文(国立民族学博物館外来研究員)の4名がティティカカ湖盆地における形成期社会の特徴とティワナク国家の成立における変容と連続性について論じるとともに、ワリの地方センターのひとつであるエル・パラシオ遺跡の発掘調査をおこなっている渡部森哉(南山大学)が、ワリとティワナクをインカ帝国にいたる古代アンデス文明の形成過程のなかに位置づける視点を提示した。総司会は関雄二(国立民族学博物館)、コメンテーターは松本雄一(山形大学)がつとめた。個別の発表後には質疑応答の時間が設けられるとともに、最後に、ティワナクの性格をめぐる総合討論が行われた。

以下は、各発表の概要である。

アレクセイ・ヴラニッチ

「建築、景観、創造の語り」

ティワナク遺跡の建築プランや社会制度はきわめて形成期的であり、国家や帝国ではない。その一方で、ティワナク遺跡の規模は唯一無二である。従来、その成長要因は農耕技術の革新という生業基盤に求められてきたが、本発表では、宗教的革新こそがそれを可能にした要因であると指摘する。

天文考古学的手法を用いて、ティワナク遺跡内の公共建造物と周囲の景観や遺跡との関係を考察すると、その遺跡景観の変遷にティワナクのエリートたちが操作した宗教的イデオロギーのダイナミズムを読み解くことができる。たとえば、ティワナク遺跡で後 300 年頃までに建てられた最も古い公共建造物である半地下式神殿は、南天の星空と星座、至日の日没を、地域の水源でありワカである南のキムサチャタ山と、ティワナク遺跡内の公共建造物に用いられた安山岩の採石地であり霊山でもある北西のカピア山へそれぞれ結びつけることによって当時の世界観を語る舞台装置として造られた。それぞれの軸線上には形成期の主要な祭祀センターやより遠方のアップが連なっており、半地下式神殿の建設はこれらを天文学にもとづいて全体として一つのシステムとして結びつけるものであった。それがティワナクの都市性の根底にある。一方、後 300~500 年に建てられたカラサヤは至日と分日の太陽の位置という天文学的知識を建築をとおして視覚化したものであった。こうした天文学的知識は農事暦の正確な把握というよりもむしろ、日食という天体現象の予言というかたちでティワナクの天文学者に一定の権力を付与した。そして、後 600 年頃のアカパカの建設はワカであるキムサチャタ山を遺跡内に人造することで、これを半地下式神殿からみたとき、まさにその頭上に南天の極、すなわち世界の中心をいただく空間の創出を可能にした。さらに、アカパナの頂上に立つとき、至日の太陽はまさに日の昇る場所（「カンタタイタ」）よりのぼる。こうしてティワナク遺跡は、新たな公共建造物をつくるたびに、それをとおして新たな世界創造の語りをイデオロギーとして発信したのである。

・アンドリュー・ロディック

「ティワナクの陰における工芸品生産—：ティティカカ湖盆地南部におけるシェーン・オペラトワールと社会関係」

近年の形成期研究では、想定以上に多くのセンターを呼ぶべき遺跡が林立、相互交流し、その後期までにティティカカ湖一帯に政治的ないし経済的な一体性を与えていたことが明らかになっている。そうした研究は土器の様式変化を踏まえた編年にも支えられるところが大きいですが、実際には、政治経済的側面に研究の焦点が集まるあまり、土器研究、とりわけそれをめぐる社会関係の研究はあまり大きな進展が見られていない。これはティワナク土器の研究がその社会的な役割を様々な角度から明らかにしてきた事実と大きく断絶しており、形成期後期の社会とティワナクとのあいだの劇的な社会の変化を土器の視点から政治経済的側面と同じ解像度で議論することを妨げている。

この問題を近年、タラコ半島内の遺跡から出土した土器の属性分析を検討してきたが、形成期後期の土器製作は、見た目ほどに定式化されておらず、遺跡ごとあるいは地域ごとに差異があることが明らかになった。また、中期の土器と後期の土器のあいだにも、混和材の選択や調整方向に違いが見られる。一方で、土器の素材である粘土はとくに入手困難な資源ではなく、だれでも容易に手に入れることができるものであった。ただし、形成期後期の土器のなかには火山灰が混入する胎土で作られたものがあり、

湖西地方南部のカピア山一帯に由来する可能性がある。このように、土器の属性分析は、レイヴとウェンガーの実践コミュニティの議論を踏まえて、これをめぐる一連のシェーン・オペラトワールの局地性と地域性として構築し直されることによって、地域間交流などの社会関係をより深く論じるための土台を提供する。

一方で、現代ボリビアにおける土器製作がどのように集落内で学習、継承されていくか、また、現代政治がどのような影響を土器づくりに及ぼしたかについて、民族考古学的な調査を行っている。調査はまだ初期段階であるものの、原材料となる粘土のなかには、その象徴的意味ゆえに他国から採掘に訪れるほどの動機を生み出すものがあり、形成期の土器製作をめぐる社会関係を論じるうえで大きな示唆を与えてくれる。また、国内流通向けの土器製作に現代政治が影響を考察することは、ティワナク国家の成立のような先スペイン期の政治的変化が当時の土器製作に与えた影響を考察するうえで一定の示唆を与えてくれるだろう。このように形成期の土器研究や民族考古学的研究は、ティワナク国家を生み出した社会的なものを理解するうえで重要なのである。

#### ・ジョン・ジャヌセック

##### 「地よりいずる都市性とティワナクの政治的生成」

ティワナクがどのような政治機構のもとに発達したのであれ、埋葬儀礼や土器、建築をめぐる物質性と実践は形成期から大きく変化している。その変化は、ティワナクとしての身体の社会化をとまなうものであり、政治的主体の形成であった。この変化は後 500~600 年ないし 650 年のあいだに興っている。

そのなかで、神殿の変化とは、それを利用する人の変化であり、視点の変化であり、世界観の変化と関わるものであり、世界との仲介役となる新たなリーダーの出現を考えることができる。ティワナクの公共建造物は単にその壮麗さゆえに造られたわけではなく、神聖とみなされる世界の「力」を流用するための装置として造られている。アンデスでは山を「生きている」「ちからを備えた」存在とみなす世界観が先スペイン期から流布しており、そうした山から切り出され、建材として用いられた石材もまた神聖とみなされる世界の一部である。その意味において「地よりいずる都市性」なのである。

岩石の微量分析を実施した結果、ティワナクの公共建造物に用いられている砂岩の大部分はキムサチャタ山麓のカウサニ川沿いで切り出されていることが明らかになった。そこは、ワカであるキムサチャタ山の母岩が露出している場所であり、現在でも儀礼がおこなわれる場所である。

ところが後 500 年~650 年頃になると、安山岩があらたに建材として用いられるようになる。その 85% はペルーのカピア山麓から搬入されており、プマ・プンコのまぐさいしや石門や、アカパナ正面の石柱など非常に象徴的な場所に用いられるようになる。また、石彫の材質も形成期には砂岩が用いられていたのが、ティワナク期には安山岩に変化し、その表現内容も超自然的な存在からおそらくエリートにあたる人物へと変化する。

このように砂岩と安山岩は補完的な関係をたもちながらティワナクを形づくっているが、カラササヤにおいてティワナクで最初に利用された安山岩は太陽の運行を視覚化する役割を果たし、その運行をワカであるカピア山の霊性と結びつける役割を果たしている。このように石材を切り出し、明確な意図をもって配置するまでの実践の鎖がティワナクという現象の一部を作り出しているのである。

・佐藤吉文

「形成期後期社会における社会政治構造の多様性：ティティカカ湖盆地湖西地方南部からの視点とティワナク国家の拡大における含意」

近年のティティカカ湖盆地考古学は形成期社会の研究にその軸足をシフトさせてきたが、一部の地域を除いては遺跡踏査にもとづいた文化生態学的ないしシステム論的視点からのマクロな政治経済の理解が大半であり、発掘調査を踏まえた具体的な社会の理解は必ずしも進んでいない。ティワナクの政治的影響下に組み込まれた近周縁として位置づけられるティティカカ湖の湖西地方南部もそうした地域の一つであり、そうした政治的近周縁からティワナクを理解するためには、まずそうした地域の形成期社会を具体的資料から理解する必要がある。ここでは、湖西地方南部の祭祀遺跡のひとつであるパレルモからこの遺跡を中心としたフリ地方の社会政治・社会経済構造を捉える。

パレルモ遺跡の祭祀遺構である半地下式広場については、信頼性の高い絶対年代測定値は示すことはできないが、層位学的データと他地域におけるカラサヤ様式土器に割り当てられた年代から、この広場が造られたのは、形成期後期 I（前 200~後 200 年）の後半の後 120-250 年である可能性が高く、近隣のトゥマトゥマニ遺跡の第 1 建築フェイズと同時代である。これにもとづいて、両遺跡から出土した土器を属性分析にもとづいて比較すると、利用されている土器の胎土の構成が大きく異なることが明らかになった。実践コミュニティ論にもとづけば、パレルモ遺跡は複数の土器製作のコミュニティと関連しており、多様なひとびとをひきつける遺跡の祭祀性とも一致する。一方で、土器の口縁サイズの分布は、周辺諸地域の同時代遺跡で確認されているものと概ね一致し、その意味では広域的な実践コミュニティの一部を為したといえる。このような地域間関係は外来の土器や石器石材の出土からも裏付けられる。

パレルモ遺跡は、広場の建築プロセスや湧水やアプなど周辺景観との関係からみて一種の「水神殿」と位置づけられた。その建設時期はまさにティティカカ湖の水位が大きく低下した時期であり、そうした気候変動がパレルモ遺跡の発展につながった。土器の属性分析からみたとき、フリ地域に見出される特徴は、早い段階でティワナクの政治影響下に入ったタラコ半島のそれと異なる。このような差異を示す手段として土器の属性分析は有効な手段であり、こうした違いを生み出す要因を理解することがティワナク発展の理解に寄与するだろう。

・渡部森哉

「ワリとティワナク：北から視点」

ペルー北部に興ったアンデス最初の国家であるモチェは、それまで繁栄した形成期の神殿社会が崩壊した地域に興っている。形成期社会が形成期末期まで継続したカハマルカのような地域では国家のような複合社会は成立しなかった。一方でティワナクは形成期社会の継続のうえに成立する。ワリ国家の成立はこれらのプロセスとは異なるが、その成立プロセスは必ずしも十分につかめていない。そこでワリの国家としての特徴を検討することでその成立過程の理解を試みるとともに、これをティワナクのそれと比較し、われわれがどのような国家を議論しようとしているのか示す。

まず検討点の一つ目は、ワリの行政センターでみられる明確なアクセスのコントロールである。ティワナクはその点で明確な意図が認められる建築がない。その意味においてワリの行政センターはのちのチムーに類似している一方、ティワナクのそれは形成期の神殿に類似する。二点目は、モニュメンタルな建築の有無である。モニュメンタル＝体積量と考えると、ティワナクの建築は形成期の神殿建築やモ

チェの建築に近いが、ワリにはそうした類の建築が見受けられず、その建築プランはチムーやインカのそれに類似する。三点目は埋葬である。インカは王をミイラとし、王墓をつくらなかったことで知られるが、そのモデルはワリやティワナクにも当てはめられる一方で、モチェや形成期の神殿のような金属製品を副葬された特別な墓も存在する。四点目は土器の構成パターンであり、ワリの行政センターで出土する土器の大半は在地様式でありワリ様式はきわめて少ない。これはティワナクの植民地遺跡の土器構成と異なる。さらに土器がインカ期の衣装のような民族指標として機能し得たならば、既に述べた土器構成はワリ国家内の民族的多様性を示すものとして理解することができるが、ティワナクの土器が示す多様性はティワナクという大きなアイデンティティ内部の多様性であり、ワリのそれとはレベルが異なる。最後はインタラクションの問題である。垂直統御を念頭に、形成期から中期ホライズンまでの中央アンデス北部と南部の関係とモノの移動を考察した時、一つの作業仮説として政治的なインタラクションに疎外されない、別次元でのインタラクションの存在を想定することができる。それが儀礼的インタラクションともいうべきものである。

ワリとティワナクにおけるモノと人の移動はそれぞれに異なり、最終的にはインカが両者を統合して新たなシステムをつくりあげた。ワリとティワナクは統合のシステムにおいて異なっているが、いずれも一方において形成期との継続性をしめし、他方においてインカを予見させる。したがって、個々の国家の特徴を理解するだけでなく、より大きな空間的、時間的枠組みの中でそれらを理解するべきである。

主催：国立民族学博物館

科学研究費補助金基盤研究（S）「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」

（代表：関雄二）

共催：山形大学人文学部、新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」計画研究 A03「アンデス比較文明論」（研究代表者：坂井正人）

協力：古代アメリカ学会